

Title	Can Preschoolers' Narratives Reflect Their Mothers' Emotional Availability?
Author(s)	諏訪, 絵里子
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59310
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【3】

氏名	諏訪 絵里子
博士の専攻分野の名称	博士（小児発達学）
学位記番号	第 25064 号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究所小児発達学専攻
学位論文名	Can Preschoolers' Narratives Reflect Their Mothers' Emotional Availability? (幼児の物語は母親の情緒的応答性を反映するのか)
論文審査委員	(主査) 教授 大井 学 (副査) 教授 片山 泰一 教授 井村 修

論文内容の要旨

〔目的〕

最早期の養育者とのやりとりは、子どもの主観的精神世界の形成に重要な役割を果たすと言われている。子どもは養育者とのやりとりを通して自己や他者に対する期待やイメージを内在化し、外的な情報を処理する際の主観的フィルターともいえる内的作業モデルを形成する。乳児期においては、子どもの愛着行動がこの内的作業モデルを反映するため、養育者-子関係の質と子どもの愛着行動との関連という視点から研究が蓄積されてきた。特に、母親の情緒的応答性が高ければ、乳児は安定した愛着行動を示すことが明らかとなっている。しかし、乳児期の主観的精神世界は発達に伴ってその内容及び表現が複雑化するゆえに、愛着行動から把握するだけでは十分とはいえなくなる。また子どもの内的世界に直接アクセスできる手法の少なから、幼児期の子どもにおける内的作業モデルを評価する研究は多くない。加えて、幼児期における子どもと養育者との関係の質についても、実際の母子交流場面の観察から客観的に母子関係を評価した研究は限られている。しかし、内的作業モデルは実際の養育者との関係に影響されながら変化し、幼児期にかけて安定化していくことから、幼児期の内的作業モデルが母子関係とどのように関連するのかを明らかにすることは重要なことといえよう。近年、子どもの主観的精神世界に注目が集まる中、欧米で発展している人形遊びを用いた Story Stem Assessment Profile (SSAP) は、臨床・研究の場で幼児に用いられる数少ない内的作業モデルを探るツールの一つとして、その有効性が示されている。本研究では幼児に焦点を当て、SSAP を用いて子どもの持つ主観的な親イメージ（親表象）を探り、また、母子相互作用の観察から母親の情緒的応答性を評価する。その上で、子どものもつ親表象と、母親の子どもに対する情緒的応答性との間に一貫性があるかを検討することを目的に実証研究を行った。

〔方法ならびに成績〕

4~5歳の就学前の定型発達児、21名（平均年齢=5.01歳 男児10名 女児11名）とその母親を対象とし、プレイルーム内での半構造化された母子交流場面の行動観察と、子どもに対するSSAPを実施した。母子交流場面における行動観察は、Emotional Availability Scales (EAS) 4th を用いて母親の情緒的応答性を得点化した。分析対象となる半構造化場面は「禁止場面（目の前のおもちゃに触れてはいけないという課題）」「自由遊び」「お片付け」「おやつタイム」の4場面からなり、子どもに対する母親の行動をEASの「敏感性」「構造化」「侵襲性のなさ」「敵意のなさ」の4カテゴリから評価した。また、子どもの持つ親表象の評価には、SSAPを用いた。ミニチュアや人形を使って、提示された葛藤場面を含む物語の続きを作るという課題を遂行させ、子どもがつくった物語に出てくる親表象をテーマごとに得点化した。用いたテーマカテゴリーは以下の9つ：「怒めを提供する親」「援助する親」「情緒的な親」「(子のストレスに) 気づかない親」「(子を見捨てる親)」「親の怪我・死」「制限を与える親」「罰を与える親」「攻撃的な親」である。

物語の中にあられる表象に、男女による性差は認められなかった。一方、EASとSSAPとの関係を検討したところ、EASにおける母親の敏感性と、SSAPにみられる「怒めを提供する親」「援助する親」「情緒的な親」の表象とに正の相関、「気づかない親」表象とに負の相関が認められた。つまり、子どものサインを敏感に正しく読み取り、温かく情緒的に反応する親は、子どもの精神世界においても、必要な時には癒し、助けてくれる、愛情深い親として認識されているといえる。また、EAの「構造化」とSSAPにおける「援助する親」表象とに正の相関、「気づかない親」表象とに負の相関が認められた。これは子どもに対して適切な枠組みを与え、誘導することができる親は、問題が起こった時に助けてくれる存在として子どもにも認識されていることが示唆される。更に、母親の侵襲性の低さと子どもの内的表象としての「支援する親」、また、母親の敵意のなさ、「気づかない親」表象との間に正の相関が見られた。このことから、子どもは干渉的でない親を、より助けになると捉える傾向にあり、子どもを脅かす親を、ストレスに気づいてくれない親として認識すると考えられる。全体として、親の情緒的応答性の高ければ、子どもの持つ親表象はよりポジティブになり、ネガティブな表象を持ちにくいことが示された。また、情緒的応答性の中でも、子どもの出すサインを適切に読み取り、反応するという親の感性が、子どもが良好な親表象を持つかどうかにも最も影響を与えやすかった。

〔総括〕

幼児の持つ親イメージは、母親の情緒的応答性のレベルに対応していた。このことは、子どもは主観的な親表象を、実際の親子関係をベースに構築しているという理論を支持するものであった。特に、母親の情緒的応答性の重要性が幼児においても示され、更に、それが表象レベルで母子関係に影響を与えるということが明らかとなった。また、子どもの語る物語や遊びには、その子が経験している母子関係が反映されると言え、これらを系統的に分析することで、子どもの内的世界を知ることができることが示唆された。以上のことから、今後の子ども理解や子育て支援を促すツールとして、子どもの物語や遊びのさらなる活用が期待される。

論文審査の結果の要旨

子どもの精神世界の発達には、乳児期から幼児期にかけての母子関係に大きく影響される。特に、子どもの周囲の環境や人に対する捉え方や感じ方は、母親との情緒的なやりとりを通して形成されていくとされるが、幼児期の子どもを対象にした実証的研究はなされていない。本研究は、幼児期の母子を対象に、母親の子どもに対する情緒的かかわり方と、子どものその主観的体験との関係を検討したものである。母子観察から母親の子どもに対する情緒的なかかわり方を評価し、更に、人形遊びを利用して子どもがどのように親をとらえているのかという親イメージを評価した。その結果、母親が子どもの情緒の流れに沿って敏感に対応するほど、子どもの親に対するポジティブなイメージは増え、ネガティブなイメージは減少することが明らかになった。つまり、幼児期においても、子どもが親をどのように捉えるかは、実際の母親の情緒的なかかわり方と対応しているといえた。

本研究は、母親の情緒的なかわり方が幼児の主観的な世界にどのように関係するのかを初めて検討した研究であり、また、子どもの語る物語・人形遊びを分析するという新たな手法を取り入れることで、幼児期の精神世界を探ることに成功しており、学位の授与に値すると考える。